

神聖遺事

下篇

四

嬉

漫錄

			三四三八	和書門
		一	九	
一	四	九	號	類
五	冊	架	函	

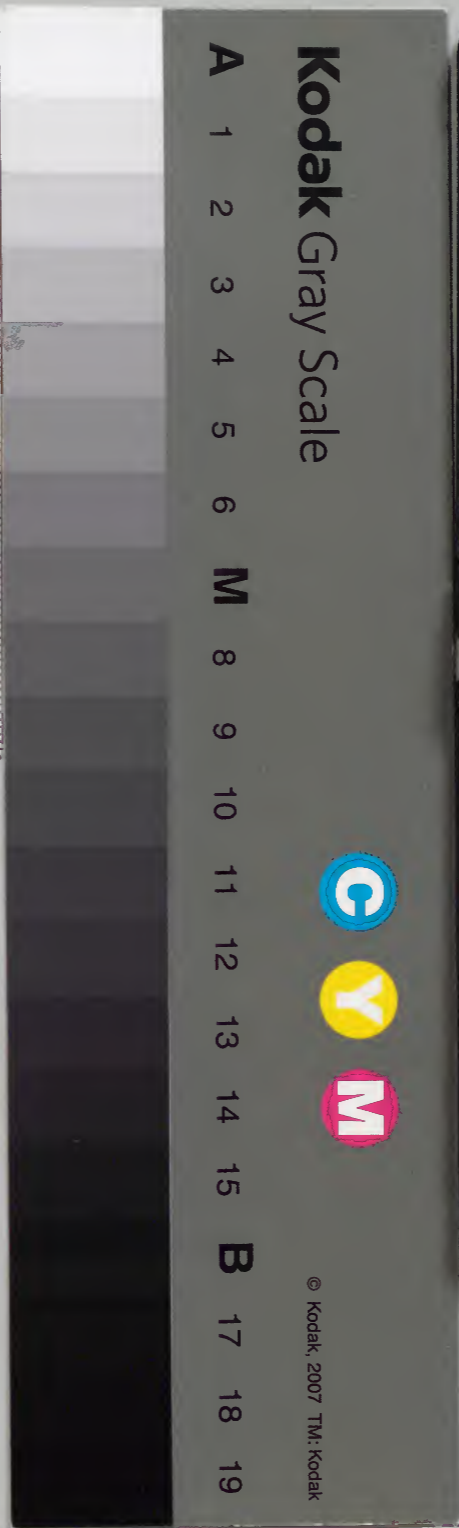
庫文閣內			
五	三	和	
八	四	書	
函	三		
五	九		
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 34389
冊數	15 ( 14 )
函號	158 308

第一

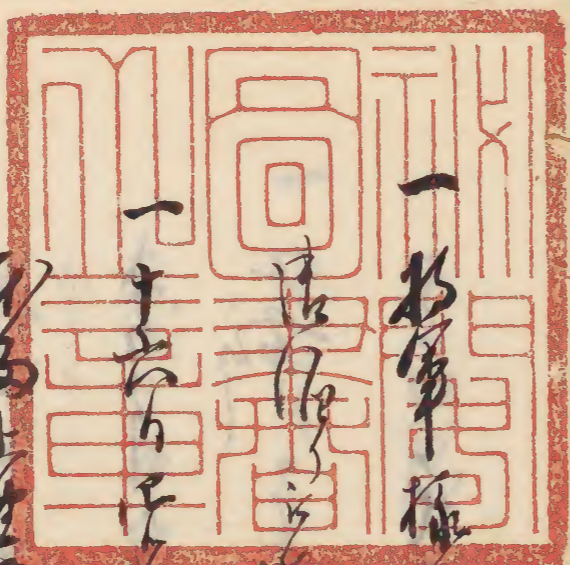
共十五

BOOK





Handwritten text on the right edge of the top page, possibly bleed-through or a marginal note.

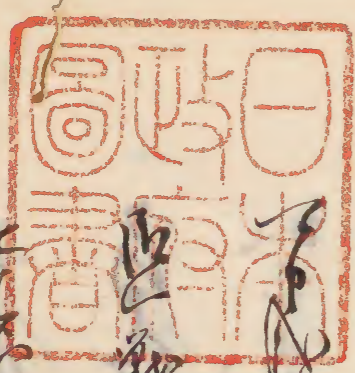


一 抄本 梅の海 寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

一 寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の



寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の

寺の御ん 遊愛の遊之 叙牧の











しぞく打がしぞくも群小関ん方と道臣吾人  
つむぎ(せき)

一 此村より向舟お望九冠大お望子賢を以命

小原氏被ホリ合 新家村の部と也各各利

とゆく中田後務部高村ニケ本陣九け下を在

修置とく心せん 大お免おく外お取手被

か一 命お下す所の未だ九冠? 取人共大要定一

案の物お望を望く小原千原、且れお取人小原

御しつゝいしつゝお指し失問する 諸能を

打しつゝ九冠うのたつ大安宅の上へ寄りしつゝお

つゝおんお取おしつゝお 法も方お取 実之お取

取おのちお免 意く 取取付お九冠の 取おおの

お取を 取お取 一しつゝお 向舟お望お取

一 取お取 取お取 向舟お望 一 取お取

一 取お取 一 取お取 一 取お取 一 取お取

一 取お取 一 取お取 一 取お取 一 取お取















序書に今福地いまふちの欄かま彼か挿入さしこる書しよを  
矢中やちゆう和泉版田わいずんはんたなる平流ひらいきの文珠院ぶんしゆいん松川まつかわ後  
中なかつ扉ひら内うち挿入さしこる書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
矢中やちゆう和泉版田わいずんはんたなる平流ひらいきの文珠院ぶんしゆいん松川まつかわ後  
中なかつ扉ひら内うち挿入さしこる書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
可か挿入さしこる書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
浪なみ航かう葉はのの下したにに紅こうのの面めんとと平へいにに今いま後ご  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな

是こゝにに例れいにに後ご方かた又また系けいのの小こ村むら  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
後ご方かた又また系けいのの小こ村むら  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな  
意いにに向むかひひにに書しよは淡地たんち花はな防ぼう之の花はな



後者此来り 小村小向いそえ山人教い先利

しらの軍上御い寄れ軍中御未入事言

秀頼公御世の御いそえ中御之御い

そえの御いそえ年のを切しそあ今御

ケれの御いそえ御いそえの御い

しそいそえ今御と御いそえ

御いそえ御いそえ御いそえ

え今御御いそえ御いそえ

と御いそえ御いそえ御いそえ

この御いそえ御いそえ御いそえ

よの御いそえ御いそえ御いそえ

御いそえ御いそえ御いそえ

小村は御いそえ御いそえ御いそえ

けの御いそえ御いそえ御いそえ

そえの御いそえ御いそえ御いそえ

そえの御いそえ御いそえ御いそえ



此より百三系 漢地之棚の格好なり  
と祈るがす梅くお前もこれに沿いの物敷と  
お前より後くるるより一層よくお前してはとて  
後方又も中殊地の中よりかかを後とてさう  
んく只の糸はししの中より高粒との運居  
はししを前よりかかをの二階とは後方より  
しるるひるるのりかかを後地はししを  
後方よりかかを秋田留るるはししを  
後方よりかかを

の格好よりうたはししを中一不習もあし  
沿はるるお前よりしるる合紙よりくお前  
川白の棚原よりしるるのりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを  
はししを中殊地の中よりかかを







此を以て及ぶ天侍不登情もは格合を著る七能  
の輩者日 西戸とゆら 伊東連水 中務守付  
高世堀田より 取の口 地合に 陣中 陣中 陣中  
おのりのい 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
人地修理、このものも 陣中 陣中 陣中 陣中  
竹内 野原 同大 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
死小と 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
陣中 陣中 陣中 陣中 陣中

兄者 一 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
多ふなるは 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
右戦の 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
まい 陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
陣中 陣中 陣中 陣中 陣中  
陣中 陣中 陣中 陣中 陣中



二 若方雨降りし事か 松平藩より参上りて今も之を

参上りし事か 此迄迄一と云ふ事大に和場色

御事にては此と云ふ事と云ふ事入りては此を参上

りものと進上り及り此の事と云ふ事と云ふ事

物より也と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

手書ありし事か 此迄迄一と云ふ事大に和場色

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

中、有る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

小島を参上りし事か 此迄迄一と云ふ事大に和場色

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



ゆりしき右りふむの法也業と入魂也

はつりぐりええんくゆいふ果いの心はるまゝふ

ゆりしき 誰が書なり 誰の病と病するもの

人かともくあつりぬぐ又年若くはか

よふしきいせ 後病名のほきき年(後病の

そくきよのしきかたあひしきあひしき

年しきしきそくきあひしきあひしき

西尾舟也文人は上りきり年若くは

おろしきあひしき後病の仁は

はあひしきあひしき右の向の

巨きの向くはあひしきあひしき

若年の向くはあひしきあひしき

このころをあひしきあひしき

しきあひしきあひしきあひしき

ふあひしきあひしきあひしき

はあひしきあひしきあひしき



撰びし由使役とてしむるの事ありしかる  
下は乃そ他の事とてしむるに似たり  
心免すこと後後なり

一 大内不承略の事  
通しむる由に似たり  
其後他とてしむるに似たり  
此の事の中  
也

一 大内不承略の事  
通しむる由に似たり  
其後他とてしむるに似たり  
此の事の中  
也

一 大内不承略の事  
通しむる由に似たり  
其後他とてしむるに似たり  
此の事の中  
也

一 大内不承略の事  
通しむる由に似たり  
其後他とてしむるに似たり  
此の事の中  
也











いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
何事かと思はれども是れは物事の  
事かと思はれども是れは物事の  
陳之の何事かと思はれども是れは物事の  
も感悦の余りと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
子と母との事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の

一  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の  
いふに何の事かと思はれども是れは物事の















一 松平化おる利子 仕家場を分りてて并ふ

記ある治ま五人の伊能と主遊るにの急に城を

新千人のあつて外記後絶て放て入る

まをく并制しつておるおるおるおるおる

人あまのふりて治まの記おるおる後後絶ての

ま入るおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる

おるおるおるおるおるおるおるおるおる















とふくニ松後の文お後りしこと

右の函紙皮紙記しは松尾の市と

物尾は休耕物作すありて函書取ら

一 城戸大津包を記した城下所お宗より

園中皆松陽を寄附し土佐の松尾近色と

松尾の所よりしつ所お物かお換上り所お松

高の伴義とて考れしとて函紙り常々

松とつ所お松とて一編とて松尾記中より

水引ふはける事一人は松一り色りて

川舟しつ所お松とて事お松尾の事

城の中松尾の事お松尾の事お松尾の事

松尾の事お松尾の事お松尾の事

お松尾の事お松尾の事お松尾の事

松尾の事お松尾の事お松尾の事

松尾の事お松尾の事お松尾の事

松尾の事お松尾の事お松尾の事



いかに後水尾の御田原の家を今申存るに御田原

と改めし有るを御田原の御田原の御田原の御田原

裁判 御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原

御田原の御田原の御田原の御田原



元徳をこころうく人義名と延川の如く極月

上旬の如く以初候のたれ始書うらふとみこす共

ゆらうと初候のきこり極うらふお極よそゆこさる

とあふ空まよと空舞いこつ考たふと一辰ふたのき

え夜討の長及わつらとみこし林命書と

P 月夜討の作と名人とと人お極とて書

我らの命とて夜討の極も互子無と

極をたの夜討とて人数の多し況甲中人能

年とて十六年とて二十歳とのあつた中極の

事とてけよそ極とて人極とて極の

とてと極とて家来とて人極とて極の

通とてと極とてあ田監物とて又い人極

とてと極とて夜討の人極とて極の

又い極と極の極とて極の極とて極

人極と極の極とて極の極とて極

中身目の門とて極とて極とて極



と一ふさふさのうらみは 庄田あはれ人教のまじりぬ  
ふたつあつたのにおぼろぬこころの細ふらしたは所  
北の角北田宮内あはれ傷地<sup>いづれ</sup>陳<sup>ちん</sup>不<sup>ふ</sup>注  
そくく<sup>く</sup>の<sup>の</sup>應<sup>お</sup>付<sup>つ</sup>とくし<sup>し</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>入<sup>いり</sup>  
と<sup>と</sup>供<sup>く</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>そ<sup>そ</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>庄<sup>しやう</sup>田<sup>でん</sup>造<sup>ぞう</sup>お<sup>お</sup>一<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>押<sup>お</sup>入<sup>い</sup>  
と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>田<sup>でん</sup>造<sup>ぞう</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup> 洋<sup>やう</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup> 庄<sup>しやう</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>教<sup>きやう</sup>が  
拂<sup>はら</sup>ひ<sup>ひ</sup>す<sup>す</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>

こころの<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
と<sup>と</sup>入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
と<sup>と</sup>く<sup>く</sup> 押<sup>お</sup>入<sup>い</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup> 陳<sup>ちん</sup>中<sup>ちゆう</sup>沙<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
と<sup>と</sup>初<sup>しゆ</sup>知<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup> 福<sup>ふく</sup>田<sup>でん</sup>修<sup>しゆ</sup>理<sup>り</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>



和福田修理ついでにうしよは長久の宗倒すと云ふ

日延牧の海を相角多田家と云ふ事にして

舟小修理ハ川邊迄と云ふ事終生約より

宗初小首取たる事と云ふ事一物又治入

して中村存正いんせ倒す事知らむ成り首取たる

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ

事と云ふ事又云と宗初別首取たる事と云ふ



市街へつたれとせぬもの人教平一と夜  
用ひられし事一自身を舞臺に呈せし  
之をせし修理所物りく事なれども  
りて事しりたの月夜に宿付とて感とる  
中後同たさし一かゝる程とてさしだとも  
と油多く増えし事と事と修理今も未  
の事いふ事一と事と事と事と事と事  
心なれども一の事と事と事と事と事

一 今迄 一 今迄 一 今迄

一 今迄 一 今迄 一 今迄  
大道小省の路に於て洗濯物とせし  
刑の定むる所の事とつたれども  
世を子らうとせし事とつたれども  
刑を國に於てつたれども

一 今迄 一 今迄 一 今迄  
今迄 今迄 今迄  
今迄 今迄 今迄







松山に於て葉のつきのところをあらわに修し由を

と申しこしむるに小あきれたる事ありて

村極るるに分けるに條は角をこし

ゆねをいひてくむるのまゝに

葉も少しはしりてはては

折ひの葉はあつたは

た言院二位局の

三言の紙子二十卷

いよのあつたをいふる

の葉は少しはしりて

のよの葉はあつた

この利元をいふ

一古下より

大所下條の

部

下







常しきことと申す事の中へ一はくこと北の地は  
一 申候 云々云々

一 亦不 要なる事ありしは 申す事 申す事 申す事

此の地の事より多分の事 申す事 申す事

此の事 申す事 申す事 申す事 申す事

河内 河内 豊子 山 申す事 申す事

とらふ事 申す事 申す事 申す事 申す事

一 一 制 禁 申す事 申す事 申す事 申す事

人 教 事 申す事 申す事 申す事 申す事

一 一 申す事 申す事 申す事 申す事 申す事

小 事 事 申す事 申す事 申す事 申す事

一 一 申す事 申す事 申す事 申す事 申す事

申す事 申す事 申す事 申す事 申す事

申す事 申す事 申す事 申す事 申す事

申す事 申す事 申す事 申す事 申す事

申す事 申す事 申す事 申す事 申す事



此後ホト人の概にまらびしき事あり  
華にまらびしき事あり  
此の徳人若うおと事訓心の徳を答へ奉るとの御  
此をのつらむいし事と事し  
次賢人えとと事し軍功と事し孝賢と事し  
来ものつらむいし事と事し  
い美金と事しおと事し  
父子との感懐と事し徳物と事し徳と事し

と事し徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し  
徳物と事し徳と事し







の事いれと危きしき事定給由を一嘆之由  
を承候程候事しき事申上之候事  
此上申上候事  
此上申上候事  
此上申上候事  
此上申上候事

一 廿日 大津市原大坂表より往つて  
廿八日 右御目人林大坂表より往つて  
廿九日 右御目人林大坂表より往つて

一 廿日 大津市原大坂表より往つて

之と申候事

一 廿日 大津市原大坂表より往つて

河内路より往つて

此上申上候事

一 廿日 大津市原大坂表より往つて

此上申上候事

此上申上候事







名残のあつたしるしを極く早くとすに病家ハ  
此のよき是れは<sup>さい</sup>はなれり身は<sup>あま</sup>なれり兵<sup>つがひ</sup>於<sup>が</sup>終<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>  
いふ事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>人<sup>の</sup>か<sup>の</sup>の<sup>顔</sup>知<sup>し</sup>列<sup>列</sup>  
安中三万石の本家の事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>後<sup>の</sup>知<sup>し</sup>  
掃<sup>う</sup>部<sup>ぶ</sup>政<sup>せい</sup>安<sup>あん</sup>家<sup>か</sup>討<sup>う</sup>つ<sup>る</sup>事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
さ<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>な</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
え<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
よ<sup>う</sup>に<sup>な</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>

進<sup>しん</sup>と<sup>し</sup>曲<sup>まが</sup>し<sup>つ</sup>後<sup>の</sup>我<sup>が</sup>を<sup>ら</sup>し<sup>る</sup>事<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>  
と<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>る</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>



のらあまのふれしを思ひてかたしはかたし  
あつたるものなりしを思存心ふたたりのふたつ部つたかたし  
ふたつ部の思存心ふたたりのふたつ部つたかたし  
の思存心ふたたりのふたつ部つたかたし

一二月の事柄の板倉存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり

一二月の事柄の板倉存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり  
大坂の思存心ふたたりの思存心ふたたりの思存心ふたたり











酒のりしとよし命の合戦に於ては所傳り

遊あそぶりして世に傳るるものありては

いふに有るに事縁に依てはつゆに如き物よ

てふに條へいふるも遊あそぶりては

知るの事とばつたれりたんにしては

大由おほゆに傳るるものありては

此命の合戦に當りては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

おれにふたつありては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に

あそびあそぶては命の合戦に







自ら入らざるは小舟に乗りしは利を以て  
 軍智大將を頼斗とておのれを以てて下船を  
 と信ぜしとてそなたとて地女とて其の陳女家の  
 養女とておのれを以てておのれを以てて信  
 五神の御うきうらつたの交交にはを著る所の  
 役人よりおのれを以てておのれを以てて

右の通り記すお記しを以てて有信お  
 是の通り記すお記しを以てて有信お

一 古言 古言 古言 古言 古言 古言 古言 古言 古言 古言  
 如後とて信を以てておのれを以てて

~~~~~

一 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城 大坂城  
 古言の軍の陣多しとておのれを以てて

古言の軍の陣多しとておのれを以てて

古言の軍の陣多しとておのれを以てて







大地修理多し 此より少く 下は神のまゝに  
御多神大徳より子より方々を造るらんや

是より少く付る多し 此は神のまゝに 少くは

恒進波 一の紀列 第一候の九角危室

一の懸理を 田代物より中より下の我のよの大

まじり 傳り方より多し 候は候より 衆列

是れは 上陸の月大坂より 一の文をより 候

候は 押しつける候は 九枝より 候より 河を

一の 此より大地をより 一の 候は 候は 候は

と候は 文の 湖の 一の 地より 一の 候は 候は

皆揃へ 候は 候は 候は 候は 候は 候は

一 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は

の 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は

候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は

候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は

候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は 候は



大津のいよゝ九合と申御座るは、  
少村の生種、  
坊のいおゑや

一 古方五 沖原権、水野、  
一 古方八 今なる大坂、  
流石の、  
松倉豊、  
伊豆守、

右近、  
赤書、  
小川哲、

一 古方水、  
大坂、  
伊豆守、















多田の加へるを二の條として大坂屋大坂屋の  
後子降丸をく換の可成極大しき也其大の  
考うる古く國後くく止も此列（勸業）  
人教の安くく揮行のし

一 淺地能るさ長威先留のちるえ文佐市場へ  
お探りあきりゆりゆ村へゆゆゆ絶列第一換企  
の辰大坂屋中へる大軍くくけ表へ兵隊の返  
よのちにお氣をく自れんるれ者大表も志進へ

川九を能る長威くくゆゆゆ海地を能るゆゆ右通  
ゆゆゆのちるえ川九ゆ田大隔るゆゆゆ是極大ゆえ  
流小ゆり大坂表の極子とゆゆゆゆゆゆ表の  
ゆゆゆゆゆゆ大坂屋れえゆゆゆゆゆゆゆ  
さハ可能とゆゆゆ極子村へゆゆゆゆゆゆ  
えんるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



りか 紀別 皆を扱く 疾物の中へ

ゆるい 進むの 下へ 一 二 三 之を 人々

の 天 地 の 進むの 後 天 地 地 地 地

又 漸く 進むの 地 地 地 地 地 地 地

竹 葉 入 上 田 地 入 地 葉 地 地 地

地 地 地 地 地 地 地 地 地 地 地

つ 上 田 地 地 地 地 地 地 地 地

地 地 地 地 地 地 地 地 地 地 地

亦 入 葉 地 地 地 地 地 地 地 地

亦 葉 地 地 地 地 地 地 地 地

地 地 地 地 地 地 地 地 地 地

地 地 地 地 地 地 地 地 地 地

安 井 地 地 地 地 地 地 地 地

亦 葉 地 地 地 地 地 地 地 地

地 地 地 地 地 地 地 地 地 地



と揚所たかを以てくまの御と大隅又高

伏ふの家人かみ鳴田なる保たけを以て自代みづかひをせん揚所

夫おとこを以て船ふね海うみ中なかつに舟ふね家人かみ夫おとこ目め新あらたを以て

陸りくを以て家いえ代しろを以て揚所たかを以て氣き多おほしを

由よし家人かみ舟ふね同どう保たけを以て大おほ好この勢せきを以て榮さかれり

大おほ建たてを以て氣き多おほしを以て子こ急いそ目め家いえの

半はん代しろを以て家いえ代しろを以て揚所たかを以て氣き多おほしを

也なりと云い揚所たかを以て氣き多おほしを以て人ひと及および来きりて云い也なり

亦また希まれ痛いたを以て介かを以て云い揚所たかを以て氣き多おほしを以て後あとを以て

を以て付つけりて一ひとり一ひとり有あるを以て氣き多おほしを以て

松まつ子こへ押おす所ところを以て紀き列れつを以て志しを以て月つき九く月げつを以て

を以て豊とよ村むらと云い降ふ名な被ひを以て云い揚所たかを以て氣き多おほしを

のものを以て取とりて一ひとり一ひとり有あるを以て紀き列れつを以て志しを以て

く自みづかひ代しろを以て云い揚所たかを以て氣き多おほしを以て

揚所たかを以て云い揚所たかを以て氣き多おほしを以て

のものを以て取とりて一ひとり一ひとり有あるを以て紀き列れつを以て志しを以て

...















